

林原美術館NEWS

HAYASHIBARA MUSEUM OF ART NEWS 平成14年10月1日

Vol.

4

特別展

「広重と北斎の

東海道五十三次と浮世絵名品展

「歌麿・写楽から幕末バリエーまで」

9月15日(日)～11月10日(日)

開催中

浮世絵は江戸時代の庶民が楽しむことができた芸術として大流行しました。現在も日本、さらに海外においても多くの人に好まれています。浮世絵に描かれた旅情・人々の表情、コマアや遊び心は、今でも新鮮で強い印象を私たちに与えてくれます。

只今開催中の本展では、歌川広重の「東海道五拾三次」を中心に葛飾北斎の

「東海道五十三次」も合わせて、日本橋から京都までの旅をお楽しみいただいております。また風景画以外にも、浮世絵の黄金期を築いた歌麿の美人画や、写楽が得意とした役者大首絵、幕末の異国趣味や妖怪絵などのバリエー豊かなものを約二〇〇点展示しています。現代でも変わらずに私たちを魅了する浮世絵をこの機会に是非お楽しみください。



葛飾北斎 「富嶽三十六景 凱風快晴」

第35回 林原美術館美術講座

平成14年10月19日(土) 13時30分～15時

特別講演会

「浮世絵の謎と魅力を語る。」

「広重の東海道五十三次のバリエー」

講師 国際浮世絵学会 常任理事 中右 瑛氏

会場 岡山県立美術館 講義室)

会費 一般の方 500円 友の会会員 300円

定員 70名(要予約)

第4回 伝統工芸探訪の旅

平成14年11月9日(土)

備前焼作家 山本雄一氏の窯場探訪

参加者受付中!

定員になり次第締切ります。お早目にお申し込み下さい。

展覧予定

「東海道五十三次と浮世絵名品展」

歌麿写楽から幕末バリエーまで

9月15日(日)～11月10日(日) 57日間

企画展 「瑞祥の美」

平成15年1月4日(土)～2月9日(日) 37日間

特別展 「世界大風呂敷展」

平成15年3月2日(日)～4月6日(日) 36日間

バリアフリー設備のお知らせ

この度、当館では、車椅子をご利用の方でも来館しやすい施設としてバリアフリー設備の新設・改装工事を行いました。

本館展示室は小高い位置にあるため、お客様には、長屋門より敷石を通過して階段を登り、お客様にたいていました。

今回の工事では、長屋門の段差を無くし、リフトやスロープ、車椅子対応トイレを新設しました。また、来館の皆様が、より歩きやすい設備として敷石の拡張工事を行いました。

なお、この設備は車椅子をご利用の方の他、ベビーカーご使用の方など今まで階段の登り下りが大変だった方にもご利用いただけます。

バリアフリー設備を充実する事で、より多くの方に快適に来館していただける美術館を目指しました。



企画展「瑞祥の美」

平成15年1月4日(土)～2月9日(日)

瑞祥ずいしよう(とほ)とは、おめでたいしるしのことを言います。今回は初春に因んで、所蔵品の中から、蒔絵や焼物、能装束などの工芸品を中心に、福を呼ぶおめでたい物を扱った展示をいたします。

昔から、日本人の縁起物に対する感覚は大変鋭く、自然と細かな決まりごとができてきました。当然、身に付ける物や使う物の図柄・形についてもこだわりを持っていました。福を呼ぶおめでたい図柄の筆頭は、吉祥文や七宝文様、松竹梅文だと思えます。次に権力者の権威の象徴である鳳凰や龍の図柄が思い浮かびます。また、その物自体がおめでたい婚禮調度や新春をイメージさせるものなど様々あります。

今回の展示で、日本人が持っている瑞祥(吉祥)へのあこがれ、その美しさを共感していただき、幸せな気分になっただけだったら幸いです。



色絵宝尽文大皿 鍋島焼

特別展「世界大風呂敷展」

平成15年3月2日(日)～4月6日(日)

風呂敷は、日本独自の伝統文化のようにはわけていまずが、けつしてそうではありません。布を使って、ものをうつむ文化は世界中にあります。様々な民族が目にも鮮やかな美しい布で物を包み、頭に寄せたり腕にぶら下げたりしていますが、これも広い意味での風呂敷といえます。トルコでは風呂敷の柵に布で衣類を包んで並べる習慣があり、まさに日本の風呂敷の語源となる風呂敷で用いる使い方です。また聖なる人間の遺体を包んだり、風呂敷には特別な使い方があります。今回の特別展では、日本をはじめ、世界の諸民族の日常的な風呂敷の使い方と、特別な使い方をご紹介します。今回の展示を通じて、紙袋の大量消費など、使い捨ての現代文化への反省と風呂敷の利便さ、美しさを再発見したいと思えます。



EVENT

イベント便り

先日行われましたイベントの報告です。
お陰様で楽しい会になりました。

第二回「美術館周遊の旅」

平成14年6月15日(土)
晴天の下、参加者43名、瀬戸内しまなみ海道を通り、平山郁夫美術館、大三島の大山祇神社(宝物館)を見学しました。

平山郁夫美術館では、別府学芸員のユーモアを交えた解りやすい解説を聞き、平山芸術を堪能しました。



昼食は大三島の「せとうち茶屋」で、産地魚介類のバーベキューを食べながら会話もすずみ、楽しい一時を過ごしました。その後、現地ガイドさんが随行し、重要文化財に指定されている大山祇神社本殿を参拝した後、全国の国宝・重要文化財の指定を受けた武器類の約八割を保存展示している宝物館を見学しました。また偶然にも、古式ゆかしい雰囲気で行われていたお田植祭も観賞する事ができました。

豊かな自然の中、心の安らぎと美の感動を体験できた一日であったと思います。



世界の風呂敷

宮井株式会社 顧問 竹村昭彦

風呂敷は方形布帛の包みもので、物品の運搬・収納・保護・総括を目的とする生活用品として定義付けられている。包みは①が源泉で、子供が母親の胎内に宿る状態を示すことから、包む行為には物を大切に扱い慈しむ心情が宿る。

風呂敷は単純な一枚の方形布帛であるため、生活文化が未発達な時代や地域においては、包むという機能の他に、敷きもの、かぶりもの、拭きもの、あるいは着物などに兼用され、くつろぎの布として自由に使用されたが、生活文化の発達に伴い、それぞれの使用目的に合わせて専用機能を有するものになり、使用目的に適する素材・寸法・染織技法、意匠模様などが選定され、これを識別するための呼称を持つようになった。これらの生活布は、すれも小さく畳むことが出来、折り返す・重ねる・纏つ・包み結ぶという動作を伴って使用され、包み纏つ平面処理の文化を形成している。

現在中国での包み布は「包袱」と呼び、それは主として木綿型紙糊防染藍染した印花布が主流を占めている。包みの語源は中国に始まり日本に伝来した。古く印花布の包袱は、一隅に織紐を通すための当布が付けられていて、品物を固定するための工夫が見られる。

お隣の韓国には李朝時代からボジマギ(裸子器)と呼ぶ生活布があり、用途別に胤物襟小袱紗(床襟御膳掛)、袋物襟小物入、着物包襟(衣包)、下敷襟卓布、婚礼襟袱紗)などがあり、これは祈福信仰の表現物として盛んに創作された。女性達は衣服の残布を大切に取りおき、小裂を心チワークして襟子器を作った。これはチヨカボと呼ばれる廃品利用という暮らしの知恵から生み出された。その多くは床襟として用いられている。



イラン織取フンディ 19世紀 124.0 x 136.0 cm

フータンはマ教を国教として、人々の生活と宗教は密接に結びついている。フータンには「フンディ」と呼ぶ四隅に生地幅と同じ長さの紐付き単衣の包布がある。その多くはイラン産の繊維で40cm・50cmの小幅を三幅縫ぎに縫合して、フンディの中央に正交を表した上下には、菱形などの幾何文を縫取織で絵羽合わせてある。

進物時には平包にした上で添付の紐で結び、シラック(ラク虫の分泌物)を火で溶かし結んだ紐を封蝋して贈る習慣がある。運搬に際しては細長い90cm幅のフンディ(背負布)で運び、封蝋したフンディはそのまま受納者に差し出され、封蝋は受納者が開封するまで行なわれる。意図するものは我國の水引結びと同意の結果表現を示すものと考えられる。フータンの住居に押入はなく、身の回り品はフンディに包まれて積重ねて収納される。

インドは染織の宝庫であり、生活をあらゆる方形布帛の総称である「ムル」によって営まれている。隣接するパキスタンは1956年インドから独立したが、生活習慣はインドと類似している。パキスタン南部では「ルマル」ペルシア語顔を拭く意(をくらしの布の総称)としており、日本の掛袱紗同様にそれは包みもの、掛けものとして用い、婚礼時の贈り物に掛けて、或いは包んで贈り、大きな進物品は木製や金属製の盆に載せ、ルマルで覆って贈られる。

パキスタン北部のトタ地方シムラでは、ルマルと同様な布を「スボトシ(ウルドゥ語)または「ドレスト(ホウ)」「バシト(ウ)語)と呼ぶ。シムラは、ホウシは覆い布を、ドレストは品物、ホウシは覆い布を意味している。

アフガニスタンのバシトワール族のバトニスボーンは四辺をフルのヒズヤ、トルソ石で飾り遊牧民であることを示し、太陽丸文(・水S字文(・羊角型)などを被らして大切なものを刺繍で表現し、食物を包み運んで食事時にはそれを敷物として用いている。

インド・パキスタン・アフガニスタンでは風呂敷蒸気浴(シ)に関する包み布の利用は見聞がない。日本と同様に風呂敷に関する包み布は「トルシリア・ムラ」にあり、トルシは包布を「ボチャ」と呼び、語源は「結び」を意味している。ボチャは主として衣裳包ともいわれる布で、トルシの生活文化でもある公衆浴場(ハラム)と深く関わっている。壮大なハナムは人々の集会場であり、女性達の集つ、花嫁の風呂「新生児の風呂」や男性の社会的祝典である「花婿の風呂」「割礼の風呂」「入隊の風呂」など、また婚礼の包み結納(子供誕生祝の進物包みは「ドド・サマ」地に金銀刺繍の袷仕立、普段用としては木綿木版更紗袷仕立が衣料収納用であり、運搬包みとしては木版更紗単衣の包み布が湯具、弁当包など用いられている。シムラでは湯具を包むボクシヤや包み布の総称である「ムラ」と呼ぶ自家用の布があり、マタガカルのストック(市)では荷物や衣裳包の頭上運搬が見られたが、現在人力運搬具としては買物時の「トル袋」が多く、ムラを持つ人は年毎にその姿を消している。インドの包み布ボクシヤも都市化が進み、ハナムも少なくなり儀式用ボクシヤも次第に見られなくなった。

中央アメリカ・メキシコ・コロンビア・ペルーでは、100cmの布で子供や荷物を運搬し、隣国ガテマラには「ネテ」と呼ぶ大きな包み布があり、緋・縞・紋織・縫取織など先染織物が多く見受けられる。また南アメリカのペルーでは山岳地帯に住むインディオが持つ生活布である「タパルカ」カヤリヤマの毛を紡ぎ平織の間に複経両面紋織の縞を配し、約130cm角の方形に仕立てた万能布がある。3000m級の高地では昼夜の温度差が極端で、昼間は品物を包んで肩力運搬したシヤが夜には毛布となり身体を包む。マタラ一枚の布で子供も包めば雨露もしくべりものとなり衣類と包みもの兼用布になる。ボリビアではアイマラ族がカカの葉を包む布を織る。この布は飾房を付けた30cm角前後の小布で現地では「ンカー」ヤヌアはタリと呼んでいる。動物の多産を祈願するアイマラの祭りに「カカ」カ酒・塩リヤマの脂肪などの供物を載せて土の女神へ捧げる敷物として用い、儀式用布として神聖視されている。「カカ」記載した布はすれも原始機で織られるため織幅は腰の幅約50cm前後のものとなり、整経し織り上げた布は一枚に裁断して「一幅」縫製される。すれも布も仕立てあがった状態では縫目を中心として左右対称の布となる特徴が見出せる。

世界の国々で使用される風呂敷を記したが、現在各国の都市部では「トル袋」や紙袋を持つ様になって、伝統の包み布はその姿を消している。



毛織経織紋織マンタ 20世紀 95.2 x 98.0 cm

林原美術館の名品から

(左上)七宝散文銀製印籠
 (左下)梅雉子鷲時絵螺鈿印籠
 (右上)七宝散文銀製印籠
 (右下)梅雉子鷲時絵螺鈿印籠

縦八・一 横六・〇 厚さ二・四
 縦八・四 横六・五 厚さ二・八 文龍齋銘

今回紹介する印籠といえは誰もが思い出す「この紋所が目に入らぬか」の一節で有名な水戸黄門に出てくるあの印籠のことである。

印籠は筒形の小型容器で腰に下げて携帯するもので、特に江戸時代に流行した。元々は名前のとおり印や印肉を入れていたが、後に葉を入れて携帯するようになった。本来ならば葉籠(くすりいれ)といふべきの種の容器を何故印籠と呼び慣わすようになったかは、はつきりしない。形態は独特で色々な種類の葉を入れることができるといふ重なる容器となっている。二段から五段に仕切られた扁平な形で、両側にあけた穴に紐を通して連結させたものが多く、蓋の両肩からのびた紐にとりつけた緒締で各段の開閉を調節する。そして腰に下げるためにその先に根付を付ける。同じ提げ物でも、庶民がたは入れを用いたのに対し、印籠は主に武士によって用いられ、時絵や螺鈿などの精巧な装飾が施され発展した。

林原美術館が所蔵するものはどれも繊細な文様が描かれており、保存状態は大変良く、大切に保管されてきたことが伺われる。その中で、今回は平成十五年の新春に開催予定の企画展「瑞祥の美」に因んで、おめでたい図柄のものを二点御紹介させていただきます。

まずは、「七宝散文銀製印籠」である。一番上の段の蓋の部分を除くと四段重ねの銀で



七宝散文銀製印籠 表

きた、持てずしりと重い作品である。図柄には大変細かい細工が施されており、各段に扇雲、窓枠を表わし、その中に、浪千鳥や七宝繋ぎ、青海波、竹、牡丹、九曜、渦などの小文を赤、白、緑、青、黄等の七宝焼で色鮮やかに描いている。模様の輪郭線を金で縁取っているため有線七宝といふ技法)、一段と豪華さが増している。ややもするとこの輪郭線の大きな模様しか眼に留まらぬかもしれないが、その中に描かれている細かい数々の意匠を是非、ご覧いただきたい。縁起の良い模様で一杯である。また、根付は銀製龍彫の獅子牡丹だが、この獅子は通常のいかめしいものではなく、何ともコミカルな顔をしている。印籠の持つ小物としての演出たる所以である。結締は可愛らしく珊瑚でしめしている。印籠本体と根付が銀製なので、珊瑚の赤色が特に映えている。

次に、「梅雉子鷲時絵螺鈿印籠」の方は、こちらも四段重ねで扁平な形をしており、表面に梅と鷲二羽を、裏面に枝に止まっている雌雄の雉子を描いている。梅の枝は銀高時絵に金銀の切金を置き、花は螺鈿、朱色に金時、銀地に金時と三種類に描き分け、花心には金を用いている。雉子は高時絵で立体的に表現し、顔は銀腹は朱に金時と変化にとんでおり、頭や羽尾の細部にいたるまで時絵技法を駆使して描かれている。二羽の鷲は一羽は枝にとまり、もう一羽は空を飛ばせることにより躍動感を出し、二羽が互いに呼び合っているかのようでは見えまい。それに対して裏面の雉子は堂々としており、一見こちらの図柄が表面かと思われ、ほと大きな構図になっているが、主役は鷲の方で



梅雉子鷲時絵螺鈿印籠 左：裏 右：表

ある。また、葉を入れるべく容器の内側は金沃懸地で縁取りをされた梨子地できている。この作者である文龍齋は、裏面や内側という目に付きにくい部分にも、よく演出をしている。根付は獅子が珠(玉)を取ろうと上に乗って遊んでいる何ともコミカルなものであるが、この獅子はそれだけではない、よく見ると口の中心に玉をくわえていて、それが、口の中で口口動くようになっている。製作当時から、玉が動くように作られていたのかどうかははつきりしないがこの獅子は大した食わせ者である。

江戸時代の絢爛豪華な時絵の中で(婚礼)調度品に次いで高い評価をされた印籠・櫛・簪などの装身具類。美しい櫛をかけることが女性のおがれであれば、印籠は伊達男の必需品であった。これらは特殊な小画面の中でそれぞれの嗜好に応じて様々な意匠を描き、技術の粋を競い合い、独特の世界を築いてきた。技法の高さもさることながら、小物という特性を存分に生かした印籠の世界を楽しんでいた。また、

学芸員 島村千秋

平成15年度「友の会」 会員募集のご案内

平成15年度の「友の会」会員を、新春から3月末日までの期間に募集いたします。詳しくは12月に募集要項にてお知らせする予定にしておりますので、お気軽に館員までお問い合わせください。企画展無料・特別展の入館料割引や展覧会案内の送付、その他会員特典が多数ございます。多くの皆様のご入会をお待ち申し上げます。

休館のおわび

大変ご迷惑をおかけいたしますが、11月11日から年末までと2月10日から3月1日まで、展示替並びに収蔵品整理作業のため休館させていただきます。何卒ご了承ください。

編集後記

4号目となりました林原美術館「ニュース」ですが、いかがでしたでしょうか。今回は3月に予定しております特別展「世界大風呂敷展」に合わせまして、宮井株式会社顧問の竹村昭彦氏にご寄稿いただきました。当特別展も是非鑑賞ください。

今年7月初旬より9月半ばまで長期休館させていただきます。今後の特別展2回、企画展1回にはたくさんの方のお越しを心よりお待ちしております。

〒700 0823 岡山市丸の内一七 一五

財団法人 林原美術館

TEL 〇八六 二二三 一七三三